
魔王様は勇者様？！

ウル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王様は勇者様？！

【Nコード】

N4298T

【作者名】

ウル

【あらすじ】

英雄ザウザが命と引き換えに魔王の侵略を退け十数年。世界はいまだ混乱の中にあつた。そんな折、一人の”勇者”が立ち上がる。男装の少女剣士ナヴィル、寡黙な従者魔女ツバキ、気弱な巫女ソフィア、ツンデレ幼女の姫君エリス。四人のヒロインを引き連れて、北を目指す彼の名は、ラルムⅡエステオーデ。第二十六代、”魔王”。これは魔王による、魔王討伐記。「我輩は魔王。暴虐非道の魔王。その我輩が、なにゆえぬしらの命を惜しむというのだ」さあ、”王道”ハイファンタジーの幕開けだ。転載作品。

「ようボウヤ」

野太い男の声。

墨色の雲が空を覆う夕暮れ時。大陸西岸最大の貿易港ムスラの、海風にうづくまる無数の獣のような倉庫群、その路地裏に影はあった。

数は四。

分けるならば三人と、一人。彼らの間には一見して明らかでないがいくつか、そして未だその一人にしか明らかならぬ違いがある。

「どうした？ 小便でも漏れそうか」

「そうだな。口あけたらそっから出ちまうんじゃないか？」

「そりゃあ傑作だぜジーク」

いひひ、と予定調和のように笑い合うのは三人のうち、二人。

どこより現れたか、染みや欠けばかり目立つ薄錆びた鎧を着た男たちは、小柄な影をとり囲んでいた。

とり囲まれているのは少年と見えた。ボロを羽織っているもの、下に着込んだのは仕立てのよいシャツで、うっすらと革鎧の線すら透けて見える。

腰には簡素な造りながら剣も下げており、その柄に刻まれた紋章から判断すれば、この街に居を構える戦士ギルド ハーロックの夜会 に所属している剣士であるらしい。

「まさかもう漏らしてるわけじゃねーよな？ なあ」

男の一人、あばた面の小男が笑いながら腕を伸ばそうとする。

「っ！」

が、それは少年の手によって弾かれた。怒りに目の色を変えた男

から、少年はすぐさま距離をとる。その手は剣の柄にかかっている。「ひやはは。そのガキ、やる気みてえだぜ？ 相手してやったらどうだよ、ジーク？」

「……うるせえ。こんな相手俺が本気になるかっての」

もう一人の男に茶化され、ジークと呼ばれた男は、今にも抜き放とうとしていた曲刀から手を離れた。

足元に唾を吐き捨て、少年をにらみつける。

「調子に乗るんじゃないぞ」

「失せなよ、馬鹿」

一喝。

少年は長い前髪の合間からジークの目をにらみ返した。

「てめえ、死にてえのかアッ！」

「待て」

激昂したジークを諷めたのは、今まで沈黙を保っていた三人目の男だった。

どうやらリーダー格であろう彼は、他二人と異なり、丁寧に磨かれた堅牢な鎧を身につけている。

「……わかりやした」

しぶしぶながら引き下がったジークに代わり、彼はゆるりと前に出る。

男としては長かるう肩までかかる金髪に、端正ながらどこか高慢そうな雰囲気醸し出す顔立ち。

「なあ少年、そう熱くならないでくれ。私はハイドリーク。私たちはただ、君と交渉に來ただけなんだ。君の持っているその、秘宝を渡してもらうためにね」

ハイドリークと名乗った男は泰然とした調子で、少年が首に提げたものを指さした。手下二人をわずかに顧みる。

「ジークもジゼットも、振る舞いはたしかに愚かだったろうが、この場は私に免じて、少し話を聞いてはくれないだろうか」

貴族のごとく洗練された所作でさし出されたハイドリークの手は

しかし、かすかな音によって応じられた。
吐き出される呼気。

「まさか。」しょーねん”相手に大の男がかりでやってきて、『交渉』だって？ 笑わせないでよね。それこそ『哄笑』もん……
だって、のっ！」

路地裏の空気をびりりと震わせたのは、打ちつけられる鉄と鉄。
街中の鍛冶場にはありふれた音であり、戦とあらば言うまでもなく、しかしこのような港近くの路地裏には似つかわしくない、異音。
打ち合い。

「その歳にしては、手練だな」

「あんたも、『陛下』^{クンマロウ}の部下にしてはなかなかだよ」

鏢迫り合う二人。

目睫の距離で交わされる言葉の内からは、互いに隠しがたい驚きと、隠すつもりのないらしい敵意とが読みとれる。

「名も知らぬ少年剣士殿からの褒め言葉、ありがたく受け取っておくことにしよう」

直後、ハイドリークは素早く飛び退いて距離を置き、再び剣を構える。

少年の鋭い蹴りが、寸前まで彼の顎のあった場所を撃ち抜いていた。

「教えてやる。僕の名前は、ナヴィルだ」

追撃。路地の汚れた土が跳ねた。

飛び散る火花。袈裟斬りから横薙ぎ。突きや払い。素早いフェイントと体移動。挑発と牽制、短い呼気が混じりあう。

ときに蹴りや組み手も用いて、二人の使い手は斬り結んでゆく。

「くっ！」

刹那、ハイドリークの剣がわずかにぶれた。

ほんのわずかな隙。しかし、鍛え上げられた剣士たるナヴィルには、その一瞬だけで十分だった。

瞬時に両手に握りなおした剣。畳み掛けるように斬り上げられた

刃によって、ハイドリークの長剣は吹き飛ばす。

「『交渉』は、決裂だ、な……っ！」

荒げた息。今にも崩れ落ちそうな雨雲の下、ナヴィルは剣を振るう。

大振りながらもわずかの隙もない、一閃。寸毫すんごうの間に、ハイドリークの頭は地に落ちる

しかし、見事な軌道は、振り抜かれる半ばで止まっていた。

ナヴィルの剣が地に落ちきる前に、手甲をはめた手でその柄を捕らえると、「いいや」とハイドリークは言った。

「『交渉』は、終わりだ」

「つくそ……！」

「どうしたんだよ。おめーの言ったとおり、三人がかりの『交渉』だぜえ？」

下卑た笑いが耳につく。

ナヴィルの両腕はいまや、ジークによって後ろ手にがっちりと固められていた。喉元にはもう一人の男の持つ短剣。

路地裏に、影は四つ。

「汚いと思うかね？」

「……ふん。気にしなくていいよ。あの小悪党の部下っただけで、じゅーぶん汚いからさ」

「減らず口とはよく言ったものだな」

どこか愉快そうにナヴィルの剣を弄ぶハイドリーク。

よく見ればナヴィルと比べても歳はそう変わらないようで、酷薄さに満ちた目元を含めても、美丈夫と呼んでも差し支えはない青年である。

「じゃあ、もう少し話してあげるよ」

得物は相手に奪われ、両腕の自由は封じられたという圧倒的な窮地にも関わらず、しかしナヴィルは取り乱していなかった。目の光は絶えず、口元には余裕の笑みすら見てとれる。

「この袋には魔術師に頼んで魔法をかけてある。だから、僕が望む

まで袋の口は開かないんだ。あんたには」

言葉はしかし、

「知らないか、少年」

口元を歪めたハイドリックによって遮られる。

「この世には私の望みを君の望みとする方法はいくらでもある。人の心を捻じ曲げる方法も、強制的に服従させる方法もな」

「そんなものに僕が屈するとでも？」

「屈するさ」

いや、とナヴィルが否定の声を上げようとした瞬間。

「つつ！」

一陣の風が唸り、鋼の刃が耳元を掠めた。

「ほう。耳を切り落とすつもりだったが、首だけでかわしたのは流石というべきかな」

キツとにらみ返すナヴィルに、醜い二人の男はにたりと顔を合わせる。

「早めに失くしておいたほうがいいつてのに」

「どうせ最期には全部ぐちゃぐちゃになるんだからな」

ハイドリック様の拷問は苦しいぜ……。

「さあ、私の城に。君の地獄となる場所に、案内しよう」

「地獄と云うのが如何なる場所か、ぬしは真に理解しておるか？」

芝居じみたハイドリックの台詞に重なるように応じたのは、ナヴィルの声ではなかった。

それどころか、この場にいる四人の誰のものでもなかった。

「誰だ」

低い声でハイドリックは誰何^{すいか}する。

突如路地裏に響いた声に、ナヴィルとハイドリック、二人の剣士は期せずして同時に眉をひそめていた。

ある程度戦士として修練を積んだ者であれば、「気配」というものを感じとることができる。

なんのことはない、それはかすかに響く足音や息づかい、衣擦れ

といった微細ながらも人の耳で拾える範疇リョウブにある音や、あるいは言葉にはし難い形而上けいじじょうの皮膚感覚である。

もちろんそういった”気配”を絶つことは不可能ではない。

だが、こつも容易く己への接近を許すなどということは、剣の使い手たる二人、特に自らの剣の腕に絶対の自信を持つハイドリックにとつては、まったく予期せぬことであつた。

しかしなにより異常なのは、とハイドリックは声を出さずにつぶやいた。

異常なのは単に”気配が”絶えていたことではない。

”これほどの気配が”、絶えていたことなのだ。

ナヴィルを押さえるジークのあばた面には汗が伝い、短剣を握つたジゼットの顔は青ざめている。

ハイドリックやナヴィルのような手練でなくとも感じ取れるほどに、その”気配”は濃密であるというのに、先刻ハイドリックの言葉に応じたなものかは、いかにしてそれを隠していたというのか。今この場に充溢し、四人の精神を蹂躪せしめんとしているのは、すさまじい”気配”。

もはや”邪気”と名状すべき、圧倒的で禍々しい何かだつた。

「なんだてめえつ。どこにいやがるつ」

先に沈黙に耐えかねたのは、短剣を手にした男　ジゼットのほうだつた。彼はあらぬ方向に視線を走らせ、何度も「どこだ」をくり返す。

ここは路地裏。人が現れるのであれば、彼らの左右どちらかからしかありえないはずだ。

あるいは

「上か」

ハイドリックのつぶやきに他の三人は一斉に空を仰いだ。

ぶ厚い黒雲によつてのつぺりと覆われた空。西で熾き火のように燃えていた太陽もいまや息絶えようとしている。

めぐらされる三対の視線はしかし、煉瓦造りの倉庫の屋根に立つ

影を、ついぞ見つけることができなかった。

「ここだ、たわけ」
声。

路地の壁をどう反響したもののか、発された方向も持ち主の性すらもまったくわからない、声。

「寝所以外でも目を瞑って暮らしておるわけではなかるうに」
五つめの影はあった。

「しかと見よ、下郎。我輩はここにおる」
ジゼットの、すぐ背後に。

「なんなんだよてめえっ」
振り返るジゼットの声には怯懦が満ちていた。

しかしそれを彼の弱さと唾うのは、少々酷であろう。

仮に剣を修めた者でなくとも、他人にこれほど至近に接近されて気づかないことは考えがたい。

まして彼の記憶では、先ほどまでこの場には間違いなく、四人の男しか存在していなかったのだから。

それがどうか。振り返った先にはたしかに漆黒の影。

ジゼットは手に持った短剣を振り上げ、気の触れたような声とともに振り下ろす 前に死んだ。

あるいは得物を振り上げた瞬間に。

もしくは背後を振り返ろうとした瞬間に。

恐怖の声を上げた瞬間に。

彼は既に息絶えてしまっていたのではないか。

その後のすべては惰性のようなものではなかったか。
ありうべきもない錯覚を抱くほど、鮮烈な死だった。

「馬鹿な」

ハイドリークの言葉がすべてを物語っていた。

路地裏、一人の男が数瞬前まで存在していたはずの地面に残されたのは、ただひとつ、膨大な量の血液。今この場に充満する、鉄錆の臭いの源のみ。

それ以外は、” 跡形もない”。

「我輩に手向かうとは、哀れみすら覚える愚昧よのう」

「あんた誰だ。今、何をしたんだ」

両腕を拘束された格好のまま、ナヴィルは問う。それはこの場に立つ”三人”の、完全な代弁に違いない。

「我輩はラルム。あの男は……うむ。そうだな。喰らわせた」

漆黒の影。黒いローブをまとった何者かは、なおざりな口調で応じた。

視線はすっぽりとかぶったフードで見えず、ただ声の調子や時代がかった一人称から判ずるには、男であるらしい。

「喰らわせた」？」

直前に自分の繰り広げた いや、本当に彼がやったものであるかすら三人には断言できなかった 惨禍が、さも当然であるかのごとくのたまう男の言葉を、ナヴィルは反復する。

ハイドリークも、ナヴィルを拘束しているジークまでもが、彼ら二人の会話を息を詰めて注視していた。

「ああ、相違ない。丁寧な血抜きをしてみたところを見ると、グレイックであろうな。今ごろはねぐらの壁にあの者の頭蓋を飾りつけるのに執心しておることだろう」

「血抜きつてのは、それ？」

ナヴィルが顎で指した地面の赤黒い染みに、影は頷く。

「あやつは生臭い肉は嫌うゆえな」

「ふうん。……まあ、なんだかよくわかんないけど、とりあえず馬鹿をひとり減らしてくれてありがたいや」

そう言うや否や、ナヴィルは背後のジークに頭突きを入れた。

わずかに緩んだ拘束から体をよじって抜けると、掴んだ腕を中心にひねり上げ、倒す。同時にブーツから抜き取った短剣で喉をかき切った。

この間わずか数秒のこと。流れるような動作で倒したあばた面の死体を見下ろし、ナヴィルは「ラルムだっけ、あんたが来てくれて

助かった」とかすかに息を荒げる。

「ふむ、たわけがまた一人減ったようだ」

直前のナヴィルの言葉に合わせて、ラルムが応じた。

「そうらしいね」

古めかしい言葉を用いる男が見せた茶目っ気に、ナヴィルは口元をほころばせる。

「少年よ。そこまでだ」

だが、ナヴィルの笑顔はそこですぐにかき消える。

その白い喉には、ナヴィル自身の持ち物であるはずの刃が、かすかな血の線を描いていた。

「……僕を殺すと、あんたの欲しがってるものも永遠に手に入らないよ?」

「さあ。それはどうだろう。君たちの契約している魔術師が、我々の陣営の者より優れていればいいのだが」

自信と嘲りに満ち溢れた声だった。

魔術師や魔法使いというものに階級があり、その間には純然たる力の差があるということは、戦士ギルドに所属している人間ならずとも、当然のように知られた知識である。

ナヴィルがある魔術師に頼んでかけて貰った魔法も、その階級差の前ではたやすく瓦解するものであるかもしれないのだ。

「その顔は凶星のようだ」

黙り込んだナヴィルに満足げに言うと、

「そうそう、あなたも」

ハイドリークはラルムと名乗る男へと声をかける。

「どのようなおつもりかは存じないが、できればここは手を引いて頂けるとありがたい。私はこの少年に用があるのでね。どうやら随分強力な魔法をお使いになられるようだ。それに驕ってこれ以上我々 黒蜘蛛 に手向かうのは、少々思慮に欠けるではありませんせんかな」

蛇のような笑みをその美しい面に浮かべ、ハイドリークは慇懃無

礼にそう言った。

彼の所属する 黒蜘蛛 は、『陛下』と呼ばれるギルドマスターを中心とした巨大な戦士ギルドである。

体面的には西部沿岸の自治を任されているという名目だが、実情は、西部の街の多くに長きに渡って搾取と圧制を続けている闇ギルドであり、北の魔王とのつながりも太い。

ナヴィルの所属し、打倒魔王を目指す戦士ギルド ハーロックの夜会 とは古くからの仇敵であった。

「わかつていただけただようですね……」

沈黙を保つラルムに対して、ハイドリークはわざとらしく胸をなで下ろす。

尋常ならざる”気配”を身にまとい、見知らぬ力を使役する男。

しかし、いかほどに強くあろうが、一人の力には限度がある。

下部ギルドも含め一万を越える人員を擁する 黒蜘蛛 の前では、彼一人など砂塵のひと粒と変わりはない。

だが。

「ぬしには悪いが、我輩もその少年に用がある。頼みを聞いてやるわけにはいかな」

「勘違いなさらないでいただきたいが」

「勘違いしておるのはぬしのほうである」

間髪を入れずに言葉を差し挟んだラルムに、ハイドリークは苛立ちを募らせる。

「ラルムといったか。お前は、まだ、わからないのか？ 私がかんなんにも寛大な態度をとってやっているのは、お前に対する哀れみ、慈悲に過ぎないということが」

ここにいたって、ハイドリークの口調に先ほどまでの鷹揚さは欠片もなかった。そして慎重さすらも。

「我ら 黒蜘蛛 を前にすれば、お前はちっぽけな蟻に等しい。ジゼットのような屑を一人殺した程度で、図に乗るのもここまでだ」
怒気を孕んだ声が路地裏の空気をざわめかせる。ナヴィルと剣を

ハイドリークは鮮血のあふれる肩口を押さえながら壁に寄りかかると、よろめきつつ後退する。

鋼鉄の鎧ごと、斬り落とされた腕。

「化け物だ……」

ラルムにその気があったかはわからないが、結果として命を救われたナヴィルであつてすら、そうつぶやかざるをえない一撃。

神速と言つにも足りない、他者に一切の知覚を許さない何か、ハイドリークを襲つたのだ。

「貴様……、何をした……?! どうやって……私の腕をつ！」

整つた顔を歪ませて叫ぶハイドリークに、ラルムはさして頓着する風でもない。

「ぬしの傷口を見ればわかるであろう。斬つたのだ。これで」

これ、と掲げられたのは一振りの長剣。

ハーロツクの夜会 の紋章の入つたそれは、本来はナヴィルの持ち物であり、ナヴィルからハイドリークが奪い、そしてつい寸前までナヴィルの喉元へと突きつけられていた、まさにその剣。

ハイドリークが握っていた、そして”今も”握っている剣。

「ぬしの腕をとり、そのままぬしの肩を斬つた。それだけのことよラルムは”剣の柄を”握っていたのではない。彼は”剣を握つたハイドリークの腕を”握っていたのだ。

「ふざけるな……そんな芸当が」

「虫よ。いつまでも喚いておると、死ぬぞ」

ぐ、と言葉をつまらせたハイドリークは、荒い息で「転移」とうめく。胸の辺りから次第にあふれ出た魔術の光は彼の体を包み、やがて消失させる。

「ラルム……貴様の名……忘れんぞ……」

光が消え入る瞬間内側から漏れ出た怨嗟の声に、ラルムは小さく応じる。

「我輩はぬしの名などもう忘れてしまったがな」

すまぬな、虫けら。

ついに水平線へ没した太陽。沖合いから運ばれてきた塩からい風が、夜を告げて吹き渡る。

ムスラの港に立ち並ぶ倉庫群のひとつ、煉瓦造りの壁に積みあがった木箱に座るナヴィルは、目前に立つ影に頭を下げた。

「さつきはありがとう。僕ひとりだったら、本当に死んでたかもしれない」

ナヴィルが勧めても頑なに木箱に腰を下ろそうとしない黒ローブの男は、ゆるりと首を振る。

「礼はよい。だが、まあ、うむ。殊勝な心がけだな」

「もしかして照れてる？」

「我輩が？ まさか。斯様なことがあるわけなからう。ぬしはたわけかまったく……」

「あんたほんと面白いな」

ははは、と笑うナヴィルの視線は、しかし足元へと落ちていた。

あの後すぐに、二人はここへやって来た。ナヴィルが血生臭い場所を嫌ったためだ。ラルムが自らの演出した地獄に気を払う様子は、最後までなかった。

「それで？ 話っているのは？」

「そうだな。だが……よいのか？ ぬしは何やら遣いの途中であったのだろう。届けに行かなくても大丈夫なのか」

気を取り直すように言うナヴィルだが、なぜかラルムは言葉を濁す。

「あんたも変だよな。そんな口調で、あんなに強いのに、いまさら僕に遠慮してるなんて」

破顔するナヴィルの表情には、先ほどまで大の男相手に渡り合っ

ていた剣士の鋭さはない。むしろ歳相応のあどけなさが浮かんでいる。

「そりゃ、早いのに越したことはないよ？　でもあんたは僕の恩人だ。話を聞くぐらいの時間ならあるって」

「そうか……」

「ほら。なんでも話してくれよ」

なおも渋るラルムにナヴィルはくだけた調子で両手を広げる。それをちらりと見て、ラルムはやはりかぶりを振った。

フードの奥で口を開く。

「……だが、ぬしは戦いが恐ろしいのであろう？」

「なっ」

彼の言葉に一瞬傷ついたような表情を見せたナヴィルは、すぐにそれを怒りへと変え立ち上がった。

「そんなわけないだろっ！」

ラルムの元へと詰め寄ると、腰の剣を引き抜き、黒いローブの胸へと押し付ける。

そこには双頭の蛇を突き刺す一本の剣　戦士ギルド　ハーロツクの夜会　の紋章が刻まれている。

「これを見るよ！　これは　夜会　の剣士として、ハーロツク様に認められた証だ！　僕は一人前の剣士なんだよっ」

ラルムは気圧されたように下がった。

鬼気迫るようなナヴィルの表情は歪み、まるで凄まじい痛みに耐えているかのようにであった。

それは怒りではなかった。真っ赤に燃え盛りながら、けれどゆっくりと身を焦がしてゆくような、言葉にできぬ煩悶だった。

「だが、ぬしは泣いておつたらう。あのジークという男を殺したときも。そして我輩がハイドリークというあの男を殺そうとしたときも、ぬしは　」

「ふざけるな！」

黒いローブの襟を掴む。

「そんなわけないだろ！」

ナヴィルがどんなに強く揺さぶってもラルムの体は小揺るぎもない。

ただされるがまま、目の前のナヴィルをフード越しに見つめているだけだ。

「自らを偽るのか」

「偽るなんて」

「ならばなぜ、あの男は本気を出さなかったのだ。我輩はぬしらの姿を最初から見とおったが、本来あやつはぬしの敵うような相手ではなかった。あやつは、間違っても、ぬし相手に手こずるような者ではなかったはずだ」

フードの向こうの声は、あまりに冷静で揺るぎなかった。

「それは……」

「それはあやつが、ぬしを侮っておったから、あえて手心を加えたからではないか？ 見抜いておったからではないのか？ ぬしの恐れを」

「僕の……恐れ……」

「左様。それは戦いへの恐れ。相手の、そして己の振るう剣への恐れだ……そうではないのか？」

音を立てて、土に剣が突き立った。

取り落とした剣にすがりつくようにして、ナヴィルはその場に膝をつく。

「ふざけんなよ」

叫ぶ声はかすかな呻きに、そして嗚咽へと変わる。

「たった一回で。なんで。なんでわかるんだよ。なんで……見抜くんだよ」

「ぬしは……」

「このために……このために僕がどれだけの努力をしたのか、あなたにわかるか?! 朝から晩まで、ずっと、剣を振り続けて振り続けて。やっと、やっと手が届いたんだよ。やっと……やっと魔王に、

復讐ができる……なのに……なんでだよ……なんで……」

なんでなんだよ！

慟哭が響く。

すべてはラルムの言う通りだった。

ハイドリックは確かに強かった。恐らく、ナヴィルよりも遙かにけれどだからといって、修練を積んだ剣士が、背後から近づく手下たちの存在に気づけないはずはない。

結局のところ、あときナヴィルが捕えられたのは、その心の中に、戦いへの恐れがあったからなのだ。

だからこそハイドリックも相手を侮り、あえてラルムの前で見せたような本気を出さず、ナヴィルを弄んだのだ。戦いを恐れ、自らの剣を恐れている者に、倒されることなどないと、理解していたから。

もしあのとキラルムが現れなければ、間違いなくナヴィルは死んでいただろう。

いや、それだけならばまだよかった。

だが、託された品物を奪われ、夜会 の頭領であるハーロックの信頼を裏切るのは、ナヴィルには耐えがたいことだった。

彼を、そして 夜会 の仲間たちを裏切ってしまうことは、ナヴィルにとって、死よりも恐ろしいこと。

『勇者』と呼ばれる男。孤児であったナヴィルが、憧れとともに見つめ続けた男。

そしてようやく共に戦うことを許されたその人を、そして彼が与えてくれたあの温かな場所を、裏切ってしまうことは。

これ以上、過ちを犯したくない

「ぬしよ」

ナヴィルの頬に、冷たいものが触れた。
指。

柔らかくも温かくもない癖に、その指は静かに優しく、ナヴィルの頬を撫で、流れた涙を拭いにとってゆく。

ナヴィルは胸を締め付けられるのを感じた。

「……家族か」

「ああ」

呻きにも似たかすかな声。ただ一言の質問だけで、ラルムは察したようだった。

十数年前、北の山脈の彼方より大陸に攻め入り、虐殺の限りを尽くした魔王とその手勢。後に英雄と呼ばれる一人の男の命と引き換えに、かろうじて退けた悪魔ども。

その黒き軍勢が各地に残した爪痕は、一人の赤子が、やがて剣を握るようになるほどの時が流れた今でも、まるで癒えてはいなかった。

「復讐、と言ったな。……ぬしの望みは、魔王を倒すことか？」
声はひどく穏やかだった。いつまでも聞いていたいと思った。

ナヴィルは幼子のように、ただただこくりと頷いた。

「わかった。ぬしが斯程の覚悟を決めておるのなら、我輩が回りくどい態度をとるのは非礼と云うもの」

そう言って、ラルムはフードを外した。

「我が剣となれ。意思も、恐怖も、悲しみも持たぬ、ただ振られるだけの剣に」

幾本もの三つ編みを垂らした、雪のごとく白い髪。彫像のごとく美しく冷たい面。

そして紅い、眼。

「我輩の名はラルム」エステオーデ。第二十六代 魔王だ」

ナヴィルは目を見張る。

白い髪と紅い眼、たしかにそれは魔王の一族の証。

暴虐にして非道、そしてナヴィルがこの世で最も憎む、悪鬼の姿。それならば、先ほどの禍々しい”気配”にも、その後見せ付けた圧倒的な力にも、納得がいく。

しかし。

今日の前に立つのは、ナヴィルの知る魔王ではない。

あの満月の晩、ナヴィルから父と母と弟を奪い、灰燼と帰した街の真ん中で哄笑を上げていた、あの、悪魔の姿ではない。

ナヴィルを剣へと駆り立て、そして同時に、自らの剣を恐れさせる要因となった、魔王では、ない。

そんなナヴィルの心中を見抜いたか、ラルムは語る。

「今、北の国を統べておるのは、先代、二十五代魔王ネロキア我が父よ。だが本来であれば、魔王となった者は、百年の治世の後にその長子へ玉座を譲らねばならぬ。ゆえに我輩は既に魔王の座を継いでおるはずなのだ。

されど、愚かにもネロキアは、玉座の持つ抗いがたい魅力に屈した。戴冠日の前日、我輩とその部下を皆殺しにし、玉座を強奪せしめんとしたのだ。……従者の手助けがなければ、おそらく我輩も死んでおつたらう」

皮肉げな笑みで、ラルムは言葉を締めくくる。

「……だけど、それでもあんたは魔王なんだろ」
応じる声は、弱々しかった。

魔王 それはナヴィルにとって 夜会 の最終目標であり、両親の仇。ひいては、この大陸に息づくあらゆる生あるもの、正義や誠実、美や善とそれを信奉するものたちの敵である。

本来ならば、今すぐここで斬り捨てねばならぬ相手のはずだ。
それなのに、どうして。

どうしてあんたは、そんなふうに。

「むろん、我輩は魔王。それが直接に指すのが おぞましくも我が父のことであるにせよ、ぬしらこの大陸の人間が『魔王』と云うものに憎しみを抱いておるのは、寡聞ながら知っておる」

浮世離れして白い指が、ナヴィルの頬を伝う。長い旅の末に垢じみて汚れた髪を、ゆっくりと梳いてゆく。

紅玉のような眼に魅入られながら、ナヴィルはラルムの行為に一抹の嫌悪も抱くことがなかった。柔らかい何かに包まれるような、穏やかさだけがあつた。

たとえそれが『魔王』によるものであったとしても、
だが、とラルムは言った。

「それでも、頼んではならぬか？」

もしかしたらそれは魔法なのかもしれないかった。

その瞬間。

「今一度言っ。 ”娘”よ、我が剣となれ」

ああ、何もかも見透かされていたのだと、ナヴィルは悟った。

「……いつから、気づいてた？」

「はじめからだな」

「でも、あのとき僕のこと『少年』って呼んだでしょ」

「どうも彼奴ら勘違いしておったようだからな。合わせておいたままで」

ラルムは質問に答えると、怪訝そうな顔になる。

「……しかしどうして急に距離をとっているのだ？」

「うるさいなっ、ほっといてくれっ」

離れた場所で顔を赤らめたナヴィルが叫ぶ。怯えたような顔で煉瓦の壁に張りつく様は少々滑稽でもあった。

ラルムは首を傾げると、立ち上がる。

「まあよい。ともかく、答えを聞かせてはくれまいか」

「こ、こらっ。そ、それ以上近づくんじゃないっ!!」

剣を構えるナヴィルに、ラルムは驚きながらも足を止める。

「ぬし、先ほどまでと大分性格が変わっておるな」

「うるさいな！ あんたがその……あーもう、くそっ!!」

耳まで真っ赤に染め上げながら悪態をつくつと、ぶんぶんと首を振り、息を整える。

ナヴィルは、幾度か咳払いをした後で、続けた。

「ともかく。ともかく、だよ。あんたが魔王で、そこで今の魔王を倒そうって思ってることはわかった。認める。僕も魔王を倒したいし、あんたについていけば本当にできるような気がする。でもやっ

「ば、僕はあんたのその……剣、には、……なれない」

「そうか……」

「で、でもさっ」

首をうな垂れ、目に見えて落ち込むラルムにナヴィルは慌てて近寄る。

「そうだっ！ ほら。あんたも一緒に 夜会 に入ればいいじゃないか」

「夜会？」

「うん。僕が入ってるこの街の戦士ギルドだよ。魔王を倒すことを目標にしてるんだ。あんたみたいに強かったら、ハーロック様だつて喜ぶさ」

「しかし、我輩の素性の問題があるっ」

「大丈夫。ハーロック様ならわかってくれる。僕たちのギルドは、仲間を助けた相手を傷つけるなんて真似、絶対にしない」

言い切ったナヴィルに、ラルムはしばし俯いて黙考してから、目を上げた。

「そうか。ではぬしの言葉を信じよう。……が、しかし、先ほどからよくわからないのだが」

再び身を引いたナヴィルの前で、ラルムは問う。

「彼奴らも言っておつたが、その、ギルドとは……なんだ？」

「え？」

ラルムの紅い眼には冗談を言っている様子はまったくなくない。ナヴィルは首をひねり、そしてようやくラルムの出自に思い当たった。

「ああそっか。あんたってこないだまで王子様だったんだもん」

「いや魔王だ。む。なぜ斯様な顔をする。信じてくれたのではなかったのか」

「信じてるよ。うん、もう面倒だからそれでいいってことで。つまり、あんたはこっちの常識には疎いってわけだろ？」

あっち ラルムの生まれ育った山脈の向こうの、いわゆる 魔界 に、こちらと同じギルド制度が敷かれているはずもない。

もちろんその他にも様々な常識が異なっているのだろう。

「かもしれぬ。我輩の知る限り、男に扮した女剣士などあちらにはいなかったからな」

「ああ、うん……まあ、それは僕が特別なだけだと思っけどね……。ああ、そうだ。えっと……あと、あの、さ……」

「どうした」

首を傾げて見つめてくるラルムからナヴィルは視線を逸らす。

「このこと、他の人には秘密にしておいて欲しい……ん、だ。特に夜会 のみんなには、うん」

「なにゆえ」

「それは……」

「まあ構わぬ」言葉に詰まるナヴィルを不思議そうに眺めながら、ラルムは請け負う。「このことは、我が骨朽ちるまで何人にも口外せぬ。これでよかるう?」

もごもごと感謝の言葉を返しながら、ナヴィルは一人得心していた。

ラルムが彼女の正体についてさして頓着していなかったのは、彼がハイドリークの名を覚えられなかったのと同じ理由に過ぎないのだ、と。

強大な力を持つ魔王たる身にとって、人間など文字通り虫けらに過ぎない。虫の名前など、まして雌雄など、誰が頓着するものでもない。

そう。だからたとえ彼が恩人であるとしても。

ラルムの父がああ邪悪なる魔王であることは、紛れない事実なのだ。

どんなに今はそう見えなくても、いつかは倒さねばならないときが来るのかもしれない。

そのときは容赦なく剣を振るおう。ナヴィルはひそかに覚悟を決める。

だが、彼女はまだ気づかなかった。それはつまり、目の前の男と

共に歩もうという決意に、他ならないのだということ。

胸をかすかに抉る、痛みを理由を。

「して、ギルドとは？」

「ああ」

思惟に耽っていたところに声をかけられ、ナヴィルは頭をかいた。

「そうだなあ……」

日常当たり前に存在しているものについて、こうして改まって尋ねられると、なかなか上手い説明が思い浮かばないものだ。

「まあ、そうだね。とりあえず自分で見ればわかるんじゃないかな
結局、苦笑いに落ち着くナヴィル。」

「うむ。それも一理あるうな」

ラルムは頷き、フードを被り直す。

「ではゆこうか」

「ああ、うん」

さし出された手を反射的に取ると、一瞬で懐まで引き寄せられる。
麝香のような香りのする胸に抱かれ、刹那安堵のようなものを覚えるナヴィルだったが、すぐさま我に返る。

「お、おい。ちょっと。何やってんだよっ」

暴れて逃れようとするも、ラルムは気にするふうでない。

「夜会 とやらのある場所にゆくのであるう？」

ならば、これが早かろう。

そう言つと、ラルムは彼女の膝を抱え上げる。

「おいおいおいっ。ちょっと、くそ、やめろって、ああああっ」

案内を頼むぞ。

横抱きにされたまま、真っ赤な顔で胸板を叩くナヴィルに、ラルムは微笑いかける。

その背からは漆黒の翼が伸びていた。

黒衣が変じたと見えるそれは、蝙蝠の皮膜に似た形で、表面を滑らかな被毛に覆われている。

「ああああもっ！ 勝手にしろよ馬鹿野郎！」

かすかにかかる吐息と、至近まで近づいた紅い眼に、ナヴィルはほとんど殺意を覚え、顔を覆った。完全に素でやってやがる。

ラルムの足が、たん、と地面を蹴る。

黒い翼が二度羽ばたけば、ムスラの港にも、見上げる夜空にも、もはやその姿を見い出すことはできなかつた。

ムスラ市街中心部。ギルド ハーロックの夜会 の本拠地前で、
守衛の青年はランプに火を入れていた。

ギルドの紋章の刻まれた大扉の前に下がるランプ。風に揺らめく
火に手間取りながらも、ややあつて青年は作業を終える。

振り返って見れば、空に垂れ込める黒雲はますます厚くなるよう
である。

季節はもう春半ばに差ししかかっているが、沖合いを流れる寒流の
せいで、ムスラの風はいまだ冷たい。雨が降ればなおさらだ。

真夜中の交代まで凍えねばならないだろう我が身を思い、彼がた
め息をついたときだった。

”夜”がやってきた。

そのとき、そう形容する以外、彼は言葉を持ってなかった。

とん、と音を立てて大通りに舞い降りたそれは、漆黒のローブを
まとい、どうやら両腕で何かを抱えているらしい、男。

すっぽりと被ったフードにより顔は窺えず、松明の火明かり程度
では、もちろん造作の子細はわからない。

「誰だお前はっ！」

青年は素早く剣を構える。

男の容姿も、放たれる気配も、唐突な登場も、彼に警戒心を抱か
せるのには十分だった。

現在 夜会 が置かれている状況を鑑みれば、男が 黒蜘蛛 の
刺客であつてもおかしくはない

「我輩はまお」

「ちよつとこらバカっ！ やめろ！」

と、突如男の抱いているものが暴れ始めた。青年がよく目をこら

せば、それはどうやら人のようである。

どさり、と鈍い音を立てて地面に落ちる人影。

「え……？」

「ん」

「なんで放した？」

「ぬしが放せと言ったではないか」

「そういう問題じゃない！」

地面に尻から落とされ、男に怒声を浴びせる少年。

それを見て、守衛の青年は眉をひそめる。

「もしかしてお前……ナヴィルか？」

「あ」

「やっぱりナヴィルか！　じゃあ 秘宝 を持って帰ってきたんだな！　こうしちゃいらねえ、俺、知らせてくるよ！」

尻もちをついたままのナヴィルとその隣に立つラルム。二人があつけにとられる間に、青年は一人興奮した声を上げて大扉の中に駆け込んでいった。

「あやつとは知り合いなのか」

「まあね。 夜会 に入ったときからの付き合いだから、けっこう長いかも」

「あれはいつもか」

「そう。 あんな感じだね」

さし出された手をとって立ち上がりながら、ナヴィルはやれやれと答える。青年のおかげで毒気も抜かれてしまったらしい。

「皮袋を検めなかった」

「まあ、ちよつと馬鹿なんだよな」

「ぬしのことも確かめなかった」

ナヴィルは額に手を当てる。苦笑いが口元に浮かんだ。

「あ……そうだな。 本当のこと言うと、すごく、馬鹿なんだ」

「んむ。 だが我輩、あやつが嫌いではない」

「僕もだ」

二人はそんな会話を交わしながらギルド　ハーロツクの夜会へ
と足を踏み入れた。

青年が知らせたのだろう。ナヴィルが大扉をくぐって現れた途端、
夜会　の広間は割れんばかりの歓声に包まれた。

「英雄の凱旋だああ！」

「ナヴィル坊やがやりやがったぞー！」

「この野郎！　無傷で帰ってきやがった！」

「早く酒持ってこいー！」

どつと殺到する屈強な男たちに、小柄なナヴィルは飲み込まれる。
前から後ろから叩き回され撫で回され、ついには胴上げまでされそ
うになる。

「ごめん、ごめん。ありがとな！　ああ。　うん。そうだよ！」

おう。　おう

かろうじて胴上げは断ると、ナヴィルは苦笑いを浮かべながら男
たちをかきわけてゆく。

夜会　は三階建てだ。

二階の一部と三階すべてがギルド員の住居、地下が武器庫などの
倉庫となっており、ギルドとしての機能は一階に集中している。

二階までの吹き抜けとなったこの広間も、その一つだ。

賓客を出迎えるエントランスであり、歓待するための宴会場。危
急のときには多数の人間を収容できる避難所となる。

とはいえ、そうした要請はそう日常的なものではない。

ゆえに日没後ここを訪れば、ギルド員の誰かしらが　夜会
の名の通りというわけでもないだろうが　酒盛りをしているの
が常なのであった。

そして他の多くのギルド員にとってそうであるように、それはナ
ヴィルにとつても、心安らげる、温かい『家族』の風景だ。

今日を除けば、だが。

青年に呼ばれて集ったのであろう、ナヴィルを祝福する男たちの

誰からも、酒の匂いはしない。

それは異常、それは非常。責は 自分にある。

ナヴィルは唇を噛み締めながら前に進む。

仲間たちは問わない。どうして、ナヴィルは帰ってこられたか。

いや、どうして”ナヴィルだけ”は、帰ってこられたのか、と。

長く苦しい逃走。ハイドリークとの戦闘。ラルムとの出会い。魔

王の願い。

畳み掛けるような数々に心を乱され、束の間和らいでいた罪悪感が、和らいでいたがゆえにより強く揺り戻り、ナヴィルの胸を締め上げる。

足が震えた。唇が切れ、口の中に血の味が広がった。仲間たちの歓待の音が、鈍い刃となつて彼女の心を苛んだ。

「みんな。そろそろ、我らが小さな英雄を通してやるうじゃないか」
柔らかい、青年の声。

応じて、夜会 の男たちが道を開けた。並んだ彼らの先、広間から二階へと続く大きな昇り階段。そこに一人の青年が立っていた。やや煤けたような金髪に、穏やかな微笑。優男ふうで細身の体つきながらも、線の細さや気の緩みはまったく感じさせない、不思議な立ち姿。

十数年前、その命を賭して魔王を退けた英雄ザウザ。

勇者と呼ばれる彼に、最も近いと謳われる歴戦の勇士の一人

戦士ギルド ハーロツクの夜会 頭領、ハーロツク・サーデヒルダ
その人である。

「やあ、おかえり。ナヴィル」

ハーロツクは、若い仲間の内心を汲んだように優しく笑った。

「ハーロツク様……」

そしてその穏やかな目は、ナヴィルへ笑いかけたのと同じ自然さで、大扉の手前に立つ人影にも向けられた。

「そして、初めまして。 ご客人」

広間の男たちがざわめき、振り返る。

視線の先には人影。おかしなことに、ナヴィルすらもひととき存在を失念していた、文字通り影のごとき黒ずくめ。

「手抜かったつもりはなかったのだが……流石に鋭い目よのう」

「いえ、私もお声をおかけするのは半ば賭けのようなもので」

「謙遜めされるでない」

ラルムはフードに手をかける。ナヴィルは思わず叫びかけたが、間を空けず、言葉を失った。

「お会いできて光栄ぞ、勇者殿」

性を超越したがごとき、白く美しい細面。

感情の見えぬ微笑の浮かんだ口元。

けれど、その眼は碧。

そして髪は、狼の毛並みに似た、灰。

「ラルム。北より参った」

その容貌はもう、魔王のそれではありえなかった。

目を丸くするナヴィルの後ろで、ハーロックが「こちらこそ、勇者など光栄に過ぎるお言葉」謙遜を返す。

「鮮やかな碧の眼、さぞかし名のある魔術師殿とお見受けする。それに、どうやらナヴィルがお世話になったようだ。私はこの幸運

いや、貴公に、心より感謝せねばなりませんね」

「む、やめよ。頭を上げよ、勇者殿。我輩はぬしの礼を拝するほど大層なことはしておらぬのだから。寧ろ、誉れを受くべきはそやつの剣であろう。並みの鍛練ではあはいかぬよ。ぬしはよい仲間を持たれたのだな」

ナヴィルには頭の上で交わされる二人の恩人 「勇者」と「魔王」

の会話を、ただただ不安げに見守ることしかできない。

「そうお褒めいただきと、私も 夜会 のみなも誇らしい。ナヴィルは我々全員の息子のようなものですから」

「ふむ。ならば、ここに居並ぶ父たちの力も、自ずと想像できような いや、想像なぞするまでもないか。みな揃いも揃った強者^{つわもの}と
いった顔つきをしておるわ」

ラルムは広間の男たちを見渡し、感心するように言った。笑いや謙遜が返される。

「ところで、ひとつ聞きたいことがあるのだが、よいか？」

「なんなりと。ただ、いつまでも立ち話もなんでしょうし、もしよろしければ、宴会の用意を待つてはいただけませんか。みなも息子の恩人と酒を酌み交わしたくて、うずうずしているようですから」

ハーロツクが言うと、男たちの間からどつと笑いが起こり、それによって、残りの微妙な緊張もすべて解けたように見えた。彼らは各々宴の準備をしようと動き始める。

「いや、この場でよい。我輩が聞きたいのは、そやつが首に提げてる皮袋、正確に言うならば、その中味のことだからな」

そんな穏やかな雰囲気は、ラルムの言葉によって一瞬で瓦解した。さすがというべきか、ハーロツクは眉をぴくりと動かしただけ程度でほとんど表情を変えなかったが、他の男たちはあからさまに強ばった顔つきになる。

なに、それ自体を云々というわけではない、とラルムは言い置く。「ぬしらは 秘宝 と呼んでおったが、その皮袋、たしかに頗る強力な魔道具 高位の魔術師でなければ扱えぬ物と見える。しかし、ここに居並ぶ 夜会 の者たちの中に、魔術師はおらん。だのに、その皮袋にはやはり、相当に強力な防御の魔法がかけられておる。それはつまり」

「ラルム殿」

語り続けようとするラルムを、ハーロツクが止める。

「慧眼けいがん畏れ入りますが、それ以上はどうぞ、やめてくださいませんか。そのことはもう、我々で十分に話し合ったのです。私たちは息子を ナヴィルを、これ以上傷つけたくはない」

「ハーロツク様……」

優しげに自分の名を口にした 夜会 の主の傍らで、ナヴィルは俯き、拳を握りしめていた。

たしかに、広間に集った仲間たちの反応を見れば瞭然ではあった。

彼らも、そしてハーロツクも、知っているのだ。ナヴィルがなぜ
秘密を持ち帰ってこれたのかを。

「どうやって、”逃げ帰ってきたのか”を。
だが。」

「それはおかしかるう」

ラルムは言った。

自分達の頭領の言葉に真っ向から反駁はんぱくした男に、広間はざわつ
いた。

「ここは戦士ギルドであろう。されば、ここに属する以上、そやつ
は戦士。そして戦士は、己が戦いに責を負わねばならぬが道理。そ
れが勝利であろうと、敗北であろうと、逃亡であろうと、な」

ゆえにこそ、そやつは傷つかねばならぬのではないか？

ラルムの言葉に広間は静まり返った。

「ふざけるな！」

一瞬の後、沈黙を破ったのは、ラルムの前へ飛び出した人影だっ
た。

「ナヴィルはまだ子供だぞ！ 俺よりずっと年下で、背なんか俺よ
りずっと小さくて、なのに俺よりも強くて……そして、それでもも
つと強くなるために、夜会 の誰よりも努力してる！ それを
お前は」

「やめなさい」

叫んだのは、あの守衛の青年だった。ハーロツクが声をかけなけ
れば、ラルムに掴みかかるところだったろうと思われた。

激昂した青年とは大きく異なり、対するラルムは悠然としていた。
「青年、思い過つな。我輩はそやつそやつの力を理解しておる。そのため
にそやつが購わねばならなかった代価の大きさも、ぬしよりも遙か
に理解しておる。なんとなれば、ぬしよ。我輩は、ぬしより、そや
つよりも強いからだ。そしてそれゆえに、我輩はぬしの誤りを知る。
ぬしよ。ぬしの今の言げんは、そやつへの愚弄だ」

ラルムの射すくめるような眼差しが、言葉が、青年から反論を奪

う。

「力には責任を伴う。それは力が大きくなるほどにまた、重い。己が力を正しく理解せず、傍若無人に振るえるのは、赤子だけに許された特権よ。青年よ、ぬしはそやつを子供と言ったな。ではそれは、そやつが、ぬしの庇護の下にあらねば己の過ちにすら向き合えぬ愚かな稚児であると、そういう意味であるのか」

ラルムが語ったのは、力と、力を持つものが負わねばならぬ責務について。

ラルムⅡ エステオーデ。第二十六代魔王。

この世に生を受けた瞬間から王であることを定められ、至上であること、絶対の強者であることを宿命付けられた者。赤子の彼ですら、備えた力は青年を遙かに凌駕していたろう。

それゆえ、ラルムの問いかけに青年が答えを持てなかったのは、至極当然のことであった。

「ハーロック殿。すまぬな」

「……いえ。私が愚かだったがゆえのこと。私はまだまだ未熟……そして、盲目であったようです」

ハーロックはそう応じて深々と頭を下げる。

これには当のラルムも含め、広間に集ったみなが驚いたが、頭を上げた彼は意に介さずに柔和な微笑みを浮かべ、ナヴィルへ向き合った。

「きみの口から、教えてくれるかい。ナヴィル」

「僕は……」

ナヴィルは言葉を詰まらせる。見上げる先には、ハーロックの優しい笑み。十数年前、あの惨劇、悪夢のような夜から、彼女を救い出してくれた人。

彼を裏切るのが 裏切ったのを認めることが、恐ろしかった。けれど、そう。もう、とうに裏切っていたのだ。

あのとき彼女は、秘宝 を持ち帰らねば、ハーロックを裏切ることになると思った。恐ろしいとおののき、やがては安堵した。

けれどあれは、嘘だ。

理解していたのだ。

既にすべてが、取り返しのつかないほどに終わっていたことを。それでも、ナヴィルは現実から目を逸らし、真実に目を瞑り、自身にひた隠しにしてきたのだ。

”また”、逃げようとしていたのだ。

「ぬしよ。我輩は人に手傷を負わすことをせぬ。たとい相手が兎であろうと赤子であろうと、我輩は常に全力を以てそやつを殺す。それが力ある者の責務、せめてもの慈悲であればこそだ」

どうして見抜く。どうして理解する。どうして突きつける。残酷だと思つた。ラルムを恨んだ。逃げることを許してくれないその人が、憎らしかつた。

悪魔は人の弱さを知り尽くしている。

そんな言葉が浮かんだ。

「しかし、例外もある」

ラルムは指を立てた。

「たとえば、慈悲をかけるにも値せぬ虫けら」

そしてもう一本。

「たとえば」

それなのに、ナヴィルの身中にどよもすのは怨嗟えんさではなく。

「傷を負つても、それを自らの糧として立ち上がる者」

悪魔は、人の弱さを知り尽くしている。

見抜き、理解し、突きつける。容赦なく喉笛を噛み切り、血を啜すすり肉を貪り腸を引きずり出して、魂までも喰らい尽くす。しかし。

「ナヴィル、ぬしは、そうであろう」

魔王は、ちがう。

魔王は、人の強さをもまた、知り尽くしているのだから。

ナヴィルは拳を固めると、ハーロックを振り返つた。

「報告します、ハーロック様。エスタボーグ、シルメア、ゼーザス、

サーミタイク、ウルヴィス、ハウザー、デルフォス、ユミネ。僕以外の仲間たちは全員、僕のせいで　僕を逃がすために、死にました」

そのときよりナヴィルの胸中に生まれた感情に、名を付けられるものはまだ誰も居ない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4298t/>

魔王様は勇者様？！

2011年6月22日23時25分発行